



常設展示 羽生の文学と歴史

開催中!!

[会場] 羽生市立郷土資料館展示室

[期間] 令和5年11月3日(金・祝)～12月3日(日) 入館無料

[休館日] 毎週火曜日、11月23日(木・祝)

羽生が舞台となった近代小説『田舎教師』関連や市内三田ヶ谷出身の詩人宮澤章二関連の文学資料と市内で出土した土器などの考古資料を紹介しています。このほか特設コーナー「学芸員の気まぐれ展示」では、「暖める道具～湯たんぽ～」と題して、当館所蔵の湯たんぽをご紹介します。是非お越しください。



文学コーナー



歴史コーナー

企画展示報告

令和5年7月15日(土)から9月24日(日)まで、企画展「収蔵資料展—近年の収蔵資料を中心に—」を開催しました。猛暑が続く夏ではありましたが、延べ4,699名もの方々にご来館いただきました。また、期間中に展示解説会を2回(7月29日、8月20日)実施したところ、延べ15名の参加がありました。ありがとうございました。



展示解説会の様子

展示内容は、平成28年から令和3年の間に寄贈を受けた資料などを中心にご紹介するもので、資料の種類としては、古文書や民俗資料、古写真、田舎教師関連資料など様々なものを展示しました。特にユーザーミキサーやテレビ受像機など昭和時代の家庭で使われた道具については、当時を懐かしむご感想をご来館の方よりお聞きしました。普段使うようななにげない道具であっても、それを作った人や使った人の様々な思いが込められた道具です。捨てられるのではなく、郷土資料館で保管されることになった品々のそんな背景を感じていただきたく、展示にあたっては、可能な限り説明文を付けました。やや文字が多くうるさく思われた方もいらっしゃるかもしれませんが、羽生で暮らしを営んできた人々が残した記憶に触れていただけたのであれば幸いです。

また、テレビ受像機の日立グローバルライフソリューションズ様や東芝科学未来館様からは家電製品の情報、電機掃除機の澤藤電機様からは、販売当時の貴重な資料をご提供いただきました。ご協力いただいた各社様に御礼申し上げます。

収蔵庫だより vol.2

施

郷土資料館に収蔵された資料をご紹介しますコーナー「収蔵庫だより」の第2回は、戦争資料についてご紹介いたします。ここでの「戦争資料」とは明治期から昭和期まで、日本が参戦した戦争のあった時期に使われた、戦争との係わりが深い資料のことを指します。当館では、主に「軍事資料」として分類し、195件250点（令和5年11月現在）を収蔵しています。種類は、軍服や国民服、警防団の制服、終戦玉音放送の録音テープ、学童疎開関連、徴兵検査関連、国民学校・青年学校関連、寄せ書きされた日章旗、記章・略綬、戦時国債券、従軍看護関連、国防婦人会関連などがみられます。このほか、陶製ゆたんぼ等の代用品や青年学校での軍事演習等の写真類や書家文書に含まれている近代文書類は、他の分類に含まれている資料も少なくありません。

今回ピックアップする戦争資料は、「千人針」（せんになはり）です。千人針は、出征する兵士に、女性が武運と無事の帰還を祈り、腰巻などにいくつもの糸玉を縫い付けたもので、アジア・太平洋戦争期（昭和12年～20年）に流行した習俗です。

当館では、令和5年11月現在で3点収蔵しています。その特徴をご紹介します。

①資料No.033384

腹巻。長さ210.7cm×幅15.0cm。白色木綿。両端に細目の留め紐を格子状に縫い付け。帯全体に糸玉を縫い付け。糸は黄色と赤色の2色で、配色に規則性はみられない。白色木綿の虎の文様が筆書きで描かれた布（既製品か）を白色木綿布に挟み、その上から糸玉が縫い付けられている。また、表面の布には、虎の絵が描かれた布の中央付近の位置に大正12年の五銭硬貨が1点縫い付けられる。虎の絵に銘あり。

②資料No.033385

腹巻。長さ271.2cm×幅15.3cm。黄色木綿。両端に幅広の留め紐を縫い付け。中央に糸玉による虎（左向き）の絵、また筆書きで、虎の絵の左側に「武運長久」、右側に「祈」の文字が朱で

される。糸は赤色のみ。絵柄が縫い付けられた黄色木綿が白色木綿に覆われる構造。

③資料No.070158

腹巻。長さ114.0cm×幅16.5cm。白色木綿。両端に細目の紐を縫い付け。糸玉による文様、糸の色、構造は、②と同様。虎の目と尾先に硬貨を縫い付け（種類は不明）。左側に個人名の墨書あり。裏面に社寺の朱印9点あり。

当館で収蔵している千人針はすべて腰巻型ですが、一般的にはチョッキ、帽子、手ぬぐいなどが知られています。また、②と③は文字や虎の文様の特徴が共通しています。千人針に虎の模様が施される例は多くみられます。これは虎が「千里行って千里帰る」と言われることから、これにあやかっただけのものといわれます。ただ、虎の文様が施されるようになった実際の理由は不明確です。

千人針習俗の始まりは明治期と考えられており、少なくとも記録としては日露戦争時には「千人力」（せんになりき）としてあらわれます。大正期には「千人針」と名を変え、日中戦争の頃に全国的な流行がみられるようになりますが、戦況が悪化し、物資が不足すると次第につくられなくなりました。

戦後78年を迎え、当時の様子を直接知る世代が少なくなる中、戦争資料の存在はますます重要になってきています。大きな空襲被害がなかった羽生地域ですが、戦争に係わりがなかったわけではありません。戦争を物語るこれらの資料は大変貴重です。将来世代に残し、平和の大切さを伝えてゆけるよう大切に保管してゆきたいと思えます。

（山崎）



千人針（資料No.033384）